

2003 年度

杏林大学 社会科学部 総合政策学部 菅原秀幸ゼミナール

アメリカ・カナダ研修旅行レポート

2003 年 9 月 9 日 (火)~9 月 18 日 (休)

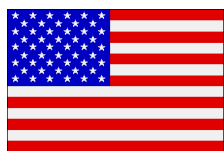


杏林大学 菅原秀幸研究室
www.SugawaraOnline.com

シアトル・バンクーバ海外研修旅行

4年 小澤久美子

はじめに、一緒に同行し助けていただいた太田さん、菅原先生、ゆう子さん、たっちゃんさん、大変お世話になりました。とても感謝しています。ありがとうございました。



憧れの地、アメリカ！私はなぜが幼い頃からアメリカに憧れを抱いていました。アメリカ人の陽気な人柄や広大な土地、日本のようにねちねち、せかせかしていないというイメージがあったからだと思います。また、音楽や映画の発信地という影響も強いです。やはり、技術やスケールの大きさに惹かれてしまいます。そういうこともあり、とにかくアメリカにいつか行ってみたいという一心と、1回目の海外研修旅行でベトナムやタイの人の働く事の意識の違いや文化などを学び、貴重な体験が出来たことの経験からアメリカへ行くことを決心しました。

このレポートでは、(1) 今回の旅行で学んだこと・有意義だったこと (2) 反省すべき点 (3) 改善点 (4) 全体の感想でまとめたいと思います。

(1) シアトル・バンクーバ旅行で学んだこと・有意義だったこと

今回の旅行で有意義だったことは、ワシントン大学生との交流会を持ったことで、アメリカの大学生と日本の大学生の勉強する意欲の違いをひしひしと感じられたことです。アメリカの大学生は、それぞれの人々がやりたいこと、将来の夢がはっきりしていて、それについて詳しく学びたいから大学で勉強しています。日本の大学生は、私もその一人ですが、将来の夢などなく、ただ流れに身をまかせ、みんなが行くからとか、肩書きが欲しいからなどという理由でとりあえず大学に通って単位をとっています。

しかし、実際これからの日本の大学教育がどのように変わっていくかは分かりませんが、日本はアメリカの企業方針や医療などアメリカ式の方法に移行してきているため、多分、日本の大学もアメリカの大学のように入学することが楽になり、専門的な科目や授業が増え、卒業が厳しくなってくるのではないかと思います。大学に通い、せっかく莫大な費用と時間をかけるのだから、そうなることが当然のように思います。行きたい大学へいけず、学びたい科目を学べなければ勉強への意欲は落ちてしまいます。もちろん、時間と意欲があるのだから、自分で学ぶことも可能です。しかし、大学に慣れた頃には、単位が簡単にとれてしまうためバイトと遊びに明け暮れ、卒業する時には、深く学んだ専門知識もなく、日本の大学生は卒業してしまうのです。独学で学びこのようにならない人も、もちろんいると思います。しかし、偏見と独断かもしれませんが、これが今の日本の大学生の現状のような気がします。そのような大学生活を送らないようにするために、今日、日本の大学も科目数を増やしたり、短期講座を開講するなど変化し続けていますが、アメリカの大学教育方針を取り入れていった方がよいと思いました。興味がある専門的な知識を伸ばすことは必要ですし、簡単に卒業できてしまっただけでは、大学へ行く意味が分からなくなってしまうからです。日本の教育方針がどう変わっているかは分かりませんが、自分の子供が大学へ行く頃には、日本の大学が変わってほしいです。

もう一つは、世界から日本を見た場合、日本という国が、結構特殊な国なのではないかということです。日本人は、他人に干渉せず、ほとんど連帯意識というものを感じません。タイ・ベトナムへいったときや今回のアメリカ・カナダへ行ったときもそうですが、とても連帯意識を感じました。テレビなどでみている限り、アフリカや中国などでもとても連帯感を感じます。また、日本は宗教も関係なければ、チップもありません。世界の国々から見た場合、日本人は変わっていると思われるのかもしれませんが。

(2) 反省すべき点

4年生として英語の面で3年生を補佐する立場だったができなかったこと

4年生だからといって、3年生に任せゼミ全体に参加してなかったこと。3年生を中心にして考えても、手伝えることはあった

個人としては、先生にあんなに言われ、前回の海外旅行で反省したにもかかわらず、英語を勉強していなかったこと。

自由時間を上手く使えず、あまり観光地に行くことが出来なかった。4年生として3年生によい見本となる行動をとらなければならなかった

バンクーバに2日のみという日程は、ハードだったし、バンクーバをよく知ることができなかった。せっかく別の国へいったのだから、せめてあと2日は必要だったと思う

(3) 改善点

困らない程度の英語力はつけたい

旅行に出る前に誰がどの係りが確認する

『ほうれんそう!』を守る。そうすれば、一人で責任を負うことが減ると思う

(4) 全体の感想

アメリカは、土地も自然も人自身も人の器もご飯も期待したとおり大きかったです。移住したいと思ってしまうほど、シアトルは居心地がよかったです。先進国ということもあり、ベトナム・タイへいったときほど新鮮さは少なかったですが、町の雰囲気や人も日本とは違い、英語が飛び交っていたので、英語を学ぶ場としても、本当にいけてよかったですと思います。特に交流会の場を持つことができ、嫌でも英語を話さなければならなかったのも、自分にとってとてもよい刺激になりました。タイ・ベトナムとは違う本場の英語を何度も何度も聞くことができ、BBQを終えたあたりから、少しhealing力がついたら勝手に思いこんでいました。クルージングや最後に行ったスペースニードルは、日本では見られない壮大な景色や夜景が本当に綺麗でした。最後の日にあの夜景が眺めることができよかったです。

ゼミにおいては、旅行の醍醐味ですが普段では見られない一面が見ることができ、全体的に親睦が深まったと思います。今回の旅行は、初めて海外旅行に行く人がいたにもかかわらず、3年生が中心となり、神田・岩井君を先頭に積極的に参加し、頑張っていたのでとても感心しました。本当にごくろうさまでした。

「考えること」を学んだ時間

4年 坂本 佑美

1. 研修を通じて経験したこと・学んだ事

今回の研修に旅立つ前の私は、昨年のタイ・ベトナム研修に比べると緊張感や楽しみであるという気持ちが少なかった。なぜなら発展途上国であるタイ・ベトナムに比べ、アメリカという国の情報は身近に感じていたし、生活状況も目に浮かんでしまっていたからである。(今、思い返すとなんて傲慢な考え方だったのだろう。)

しかし、いざ行ってみるとやはり想像と現実とは全く異なるものであった。まず、出発前は簡単な英語を話すことには抵抗感なんてないだろうと考えていたがこれが甘かった。初日、スーパーでチョコレートを一つ買うことさえままならないほど、緊張感と恥ずかしい気持ちに襲われてしまった。自分が情けなかった。ただ、シアトルの人々はこちらが笑顔を出すと必ずといっていいほど笑顔を返してくれた。日本ではほとんどない状況なので嬉しかった。しかし、後で聞いた話によると、これらのほとんどが上っ面らしい。だとすると何のための笑顔なのかよく理解できなかった。

今回の研修では、私は出来るだけ自分自身で現地の人と直接話したいという気持ちがあった。また、アメリカの中のほんの一部ではあるけれど実際の「アメリカ」を自分の目で見たかった。

自分自身で直接話し話しかけるという努力はできたと思う。その結果、先生の言っていた「アメリカ人は適当である」を、身をもって経験する事が出来た。歩いていた人5人に店の場所を聞いたとき、全員違う場所を教えてくれた。結果、目的の場所にたどり着くまで同じ場所を何回も歩くことになってしまった。

その反面、日本よりもシアトルという土地は住みやすく、そこに住む人々もとても賢い人たちだと感じる事がしばしばあった。例えば、日本よりも建物内のバリアフリー化は進んでいた。公共施設の段という段には車椅子が通れるような仕組みが施されていた。その他、小さい子供がより興味を持つように、あらゆる所に細工をしてあった。これらは、日本が見習わなくてはいけない点だと思う。

そして最後の夜、私は抱いていた疑問をアレンにぶつけた。この疑問とは戦争についてである。飲んだ後の楽しい時にその類の話をアメリカの人にするのは抵抗があり、拒絶されたらどうしようかと内心では緊張していたが、彼は笑う事も無くまじめに聞いてくれた。それが何より嬉しかった。

アメリカ人はアメリカ中心の考え方をしていると話してくれた。その結果が戦争賛成へと繋がっているらしい。シアトルに住む人々はその考え方には反対していて、ブッシュ大統領を嫌う人が多いそうだ。アメリカに住んでいながらこの考え方を持っていることに驚いた。これに対して、私は日本に住んでいながらも日本の歴史については無知とっていいほど何も知らなかった。質問されても答えることが出来なかったのである。このことも海外へ出て改めて実感する事となり、日本人として最低限の知識は身につけなくてはならないと反省した。

2. 反省点

気持ちの緩み、連絡手段の確保

去年は日々の生活に緊張感を持っていた。危険な場所であると認識していたからだ。それが、今年は安全な場所であるという思い込みが頭の隅にあり、気持ちに緩みがあった。その結果、集合時間を間違

える、連絡の確認を怠る、という状況を作ってしまった。自分の不注意によって、気付かぬところで他の人に心配や迷惑を掛けてしまったということに対して本当に反省したい。

携帯電話が無く、別れてしまうと連絡を取ることが難しい世界だからこそ、もっと連絡を取り合う方法や段取りを決めていく必要があったし、自分からその努力をしていくべきであった。

人間関係

今回の旅を通じて3年生の一人一人や4年生同士とゆっくり話をしたいと思っていた。実際今まで以上に話す機会を持つことが出来たし、お互いの新たな一面を知ることも出来た。ただ、私にとって旅の目的はそれだけではないという考えもあった。しかし、この自己中心的な考え方によって、他の人が自分を犠牲にするという考え方になってしまったのだとすると本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。今までの生活では考えたことがないようなことまで考えるようになった。そして、人の意見を素直に受け入れることの重要さと難しさを学んだ。

3. 研修全体を通して

このゼミに入る前、私は旅をするにも日常生活を送るにも安定を求めている。それが最近では知らない土地を直接自分の目で見たいという願望が生まれている事に気付いた。その場に止まり続けるよりも動く事を好むようになったのである。また、日本は狭いのだと感じるようにもなった。これらの考え方を持つ事が出来たのもゼミに入り、様々な場所へ研修に行った結果なのだと思う。

日本から出て、異国の文化や人に出会うことは何にも代えることができない本当に貴重な経験だと思う。バスに乗る事さえ大きな困難に感じてしまう環境の中、日本から出なければ絶対に思いもしないことを考え、悩みながらも日々興奮していた時間を、今後岐路に立ったときには思い返して生かしていこうと思う。

最後に、このような機会を与えてくれた菅原先生、旅を支え、話を聞いてくれた太田さん、本当に素晴らしい旅を作ってくれた3年生、多くの話をして考えることを教えてくれた今村君、岩崎君、小澤さん、本当に感謝しています。ありがとうございました。

私の中のアメリカ

3年 遠藤裕史

今回のアメリカ合宿は、私の中でとても素晴らしいものだった。分からない事ばかりで回りに助けられた。今回のアメリカ合宿で学んだ事は、英語の重要性、友達の大切さ、この二つを学んだ。私は英語が苦手で自分から決してやろうとはしなかった。しかし、英語しか使えない環境に自分をおく事により、その重要性、必要性を強く感じた。特にサンフランシスコでは、誰も助けてくれない状況で自分の伝えたい事が伝えられない事が多々あった。サンフランシスコにはそうなるために行ったのだが、サンフランシスコの空港で、自分の手荷物受け取り場所が分からず、辞書を片手にいろんな人に聞いた。ダ

ウンタウンに行く時も、シャトルの人に自分が行きたいところがなかなか伝わらない、などなど英語の重要性を感じなかった事が無かった。それとともにシアトルで自分を助けてくれた友達の重要性を強く感じた。

アメリカに対する旅行前の私のイメージは、危ない、汚い、自由この3つのイメージだった。確かにこのイメージは間違っていないと思うのだが、それ以上に良い面が見えた。アメリカ人はみんな親切、町はとてもきれいということである。私が道に迷いうろろしていると、向こうの人が声をかけてくれた。日本で私がもし外国の人が困っていてもまず自分から声をかける事は無いと思う。アメリカ人に声をかけられなければそのような事は思わなかった。私自身困っている人がいたら声をかけようか？と思う時はあるのだが、私自身分らないのだが、なぜか声をかけられない。それがすごく難しい。アメリカ人が私が難しいと思っている事を簡単にできてしまう。それはすごく尊敬するところである。ドアで後ろの人がいたら開けてく、という事に関しても私にはとても難しかった。ごく簡単な親切これが私にはすごく難しかった。日本で同じ事をしてみたが、「ありがとう」の一言も無い。日本人は案外冷たいなと私は思った。これらは生活環境によるものが大きいと思うのだが、アメリカ人の良いところを自分自身の中に取り込めればと思う。何かしてもらったら「ありがとう」という。失礼な事をしたら気がつき「ごめんなさい」と謝る。これは、人として当然のこと。これを当然のように行っているアメリカ人を私は尊敬する。

次に町の話になるのだが、シアトル、バンクーバー、サンフランシスコと3つの都市を今回見てきたわけであるが、アメリカの都市はとにかく綺麗である。私はアメリカは汚いイメージを持っていたので驚いた。歩きタバコをしている人がほとんどいない。ゴミが道端に落ちていない。これはすごい事である。バンクーバーでさえ日本より綺麗なのに、バンクーバーを汚いと感じてしまうほどアメリカの都市は綺麗だった。アメリカ人一人一人が自覚を持っているのだと感じた。日本人は私1人ぐらいゴミを捨ててもいいと思う人が多すぎる。この差が町が綺麗か汚いかという事につながっていると思う。とは言うものの私自身その中の一人であった事は否定できない。これからの生活の中でこのような事をなくして行こうと思う。

シアトルはすばらしい所。ダニエル・ジェフ・アランの3人と知り合えた事は私にとって、とても大きなものです。あの三人に出会わなければ、今回の旅行はただの旅行になっていた。一緒にご飯を食べゲームをやり、3人から素敵な思い出を沢山もらった。3人にはとても感謝している。3人は私の中のアメリカアメリカの印象を180度変わらせてくれた。また会いに行きたいと思っている。すごく楽しい時間をすごさせてもらった。3人ともすごく良い人で私の英語にも良く耳を傾けてくれた。この事が私に英語をやってみようと思わせるきっかけになった。自分の意思もまともに伝えられない。そんな自分に腹が立った。3人と分かれる時に「もう一度戻って来い」といつてくれた事はとても嬉しかった。そのようなわけでもう一度私はシアトルに行きたいと考えている。

これらの体験を元にしっかりと英語を勉強し、普段の生活から私を助けてくれた友人を今まで以上に大事にして生きていきたいと考えている。私だけは良いという考えは捨て、ONE FOR ALLという考えを持って生活していきたい。自分から何か行動を起こす重要性みんながどのように考えているか和常

に考えていければと思う。先生、りんさん、ダニエル、ジェフ、アラン、ゼミのみんな、たちちゃんさん、皆さんのおかげでとても有意義な時間をすごさせていただきました。本当に感謝しています。ありがとうございます。先生にはご迷惑をおかけしましたが、日本ではできない体験をさせていただきありがとうございます。

水の街シアトル

3年 神田 勉

シアトルは、アメリカで最も訪れてみたい街、そして住んでみたい街に選ばれた事もあるとても美しく安全な印象が自分の目でも強く感じられた。街からは、ワシントン湖、ユニオン湖、エリオット湾などが見え、そして多くの高層ビルがうまくマッチしていてとても美しい街であった。シアトルからカナダのバンクーバーへも車で3時間ちょっとで、入国審査があり、島国日本では味わえない経験ができた。

シアトルでは、新鮮なシーフードはもちろん、野菜、果物や手作り雑貨、Tシャツなども売っています。ある店の床には、そのマーケットを作る為に募金した人達の名前が刻まれていました。何か温かい人たちが多いシアトルそのものを感じました。バスに乗っていると「日本から来たのかい？」などと声をかけられたり、初日にホテルに戻る時、「迷ったのか？なら教えてやる」と、はなしかけられた。なんと良い人たちだったか。シアトルは、トム・ハンクスとメグ・ライアンの映画”めぐり逢えたら”(Sleepless in Seattle)のなかにも出てきます。やはり、映画で見たとおり、素晴らしいまちであった。

ここで、シアトルの歴史について少し書きます。シアトルのダウンタウンは1889年に大火事になってほとんど焼けてしまいました。それまでシアトルは、娼婦の街として知られていたそうです。その火事が起こる前までは、道路が低すぎる為に雨が降るたびに街中みずびだしになったり、また満潮時には、下水が逆流したりする問題を抱えていました。ちいさな火事が大火事になってしまったのも水圧が低い為に消火栓が役に立たなかったから。そこで、この大火事のあと、すべての路を3メートル上げる事にしたそうです。その結果、その当時にあったビルなどに入る時には、2階から入って、階段で1階におりるという風になっていたそうです。いまでは、この1階が地下となり、”アンダーグラウンドツアー”というツアーまでできたそうです。このツアーでは、シアトルの歴史に降れることもできて、どんどん有名になっていっているそうです。

そしてシアトルの都市名の由来はチーフ・シアトルという人物です。

「動物たちなくして人間とは何か。

もし、すべての動物たちが死に絶えたとしたら、

人間は魂の淋しさに耐えられず死んでしまうだろう。

動物たちに何か起きれば、それはすぐに人間の身の上にも起こる。

すべての物事はつながっているのだ・・・」

この言葉を言った人です。シアトルの先住民のリーダーだった人・・・〔私は知らなかった・・・〕

シアトルは緑と水に囲まれたその美しさから「エメラルド・シティ」の愛称を持っています。生活水準や文化レベルも高く、アメリカの中でも暮らしたい街として人気が高い街です。人口57万人弱、面積約218km²（東京都の約1/10）中心部にビルが聳え立つ位で周囲は豊かな自然が広がっている。国立公園も近い。シアトルの気候は穏やかで過ごしやすい。一番暑い7月でも最高気温は25度を越えることはあまりない。夏場の最低気温は12、3度。寒い街であり、冬場は日本の最北部とほぼ同緯度なのに内海に面してる為、意外なほど雪は積もらない。最高気温8度、最低気温2、3度くらい。氷点下になることはない。観光に適したシーズンは6月から9月前半。なぜなら9月後半から10月シアトルは雨季に入るから。冬場も雪より雨が多い。雨はシアトルの名物とまで言われている。

私達が研修に行ったときは丁度雨季前だったせいか雨ばかりで、晴れることはあまり多くない印象であったが、一日中雨が降ることもなく、日本の雨季よりは過ごしやすかったといえる。シアトルは湿気もなく、日本に着いた瞬間「私達はこんなにも湿気が多く、過ごしにくい所だったんだ」と実感したほどです。

シアトルのTAX（税）はセールス・タックス8.6%、レストラン・タックス9.1%、ホテル・タックス15.2%とロスやニューヨークのような大都市並みに高く、ここでもやはり、日本との違いを感じました。日本では、消費税が5%、ホテルのサービス料金としてもシアトルのように15.2%はないです。実際はドルの価値をうまくわきまえていないせいか、払うことに苦は感じませんでした。それは物価が安いからだったでしょう、ビールにしたって日本の一割、二割程度安くて、大型ショッピングセンターでも安いといった印象です。物自体は安く、税金が高い、しかし日本で見てみれば、物が高く、それに対してさらに税金をかける。それが日本との違いだったといえます。

シアトルの観光は中心部だけなら上手く回ると1～2日で見て回れました。ダウン・タウンやデパートが密集していて、夕方にもなると多くの人たちがショッピングをしていた。ただ、高級ブランド店やデパート、店の対象としている人が高所得の人たちであるせいか私は、ダウン・タウンでは何も買わなかった、というより何も買えなかった。私にはUWの近くの学生通りのほうが性にあっていて、面白かった。物も安く若者も多かった。日本人も少なく、現地の人々に触れ合うこともできた。特にUWはとても綺麗で、大学内はすばらしく、噴水、湖や、大きい図書館があり、結婚式を終えて、写真撮影をしているカップルを見た。家族ずれもいたし、大学というより、ひとつも街であった。日本では大学は学生の行く所という概念が強いが、UWでは街の中に大学があるような印象でした。そして交流会が楽しかった。不慣れな英語ですが、一人で話しかけることが今となっては自身ではないけれど、話すことに恐怖心がなくなりました。ただ、私自身の英会話力がない事が問題でしたが…。ジェフやアレック、そして他の人たちに恵まれて素晴らしい経験ができました。アメリカの学生は本当によく勉強をし、遊びもしすぎず、自分がいかに未熟であるかも実感しました。

産業で言うならボーイング社の工場。見学も行ったけど他国の航空会社の飛行機も作り、民間から軍事製品まで扱っていて、まさにグローバル会社と言えよう。ソフトウェア産業でもシアトルは有名。マ

マイクロソフト社の創始者ビル・ゲイツ氏の豪邸もある。ちなみにマイクロソフト社の見学は出来ません。外から眺めるしかないけど。〔笑〕

面白いところではブルース・リーとその息子ブランドン・リーのお墓があることだ。ファンなら必ず行きたい場所なんじゃないかな？そのブルース・リーが一時在籍し、あのボブ・サップも在籍していたワシントン大学。そんな視点から見てもシアトルはいい。

シアトルのまた違った顔としてアートなどところがある。いたる所にオブジェがあったり、音楽ではグランジ・ロックの発祥の地でもある。ブロードウェイにはあのジミ・ヘンドリックスの像も立っている。ちなみにシアトル・センターには通称EMPと呼ばれるロック・ミュージックの博物館も（笑）ダウタウンにはラッセンの実兄がギャラリーを経営してたり、娯楽の面でも充実している。

そして勿論スポーツ！今回私達が行ったMLB（メジャー・リーグ・ベースボール）以外にもNFL（アメフト）やNBA（バスケット）が楽しめる！スポーツ好きの人にはたまらない場所である。野球好きの私にとっては今回の楽しみのひとつでもあった。結果はマリナーズは負けて、イチローも功守といいところはなかったが、雰囲気は最高であった。

カナダのバンクーバーは日本人が多く、物価も安くて、楽しかった。アメリカとの違いは街の人が冷たく、街自体も汚く、日本を思わせる雰囲気だった。みんなは物が安いので、買い物に精をだしていました。もちろん自分を含めて。とにかく日本人が多く、飲み屋で話しかけたら、日本語で返されたほどです。

自分自身の評価としては、英語は勉強してもやはり、しゃべるときにはおぼつかず、うまく伝わらないことが、多かった…。自分の英語力のなさを痛感しました。しかし、それでも話すことが重要で、発音を教えてもらったり、簡単な英語ではあるが、打ち解けることが、できました。それはジェフやアレック、ダンらのおかげでもあります。そして、海外研修が自分にとって良い意味での刺激になりました、英語をあらためて勉強しなければという気になりました。それは危機感のようでしたし、英語が話せればもっと、もっとコミュニケーションがとれました。街で話しかけられてもうまく話せませんでした。自分のパワーポイントもひどく反省すべき点でもありました。全体のパワポにばかり追われ、自分のパワポをおろそかにしてしまいました…。

あとゼミ長として全体を見ると、名目上は個人行動でしたが、最初の数日間は全体行動のときに係りの徹底ができていなかったのと、役割を全体に配分できなかったため、何もしない人がでてきてしまったり、協力をみんなできなかつたような気がします。悪く言えば、調協性、協力性に欠けていました。しかし、岩崎社長、今村君、太田さんの助けで、全体でミーティングをして各自の役割や協力を話し合うことができました。正直栄村さんにばかりまかせきりな所もありましたし、ただ旅行気分だけな人もいました。そこで悪い所を指摘し、修正しました。個人といってもやはり全体行動なので、後半はまとまりつつ、個人行動ができました。それは岩崎君のナイスフォローにつきます。うまくまとめてくれたし、ひたすら全体を見ていてくれました。ゼミ長の私としては大変お世話になりました。太田さん、岩井君にも裏でフォローしてもらいましたし、普段話さない人と積極的に話しかけていたし、困ったひとが

いれば、岩崎君同様相談に乗っていてくれました。太田さんは悪い所を指摘してもらいましたし、海外経験があるのでいろいろと助言をしてもらったし、助けてもらいました。みんなのおかげで無事終わられました。自分もいい勉強になりました、異国の地に触れ、異国の人と触れ合う。日本でただ住んでいることが、いかに小さいことか…。素晴らしい経験の機会をありがとうございます。先生も言うように今度はぜひ個人で行きたいものです。

あといろいろとシアトルではお世話になりました。たくさんご馳走になりましたし、たっちゃんさんにもお世話になりました。ありがとうございます。

アメリカ合宿を経て

3年 健木 麻由

1. 有意義だったこと

シンガポール観光やオーストラリアでのホームステイとは異なり、今回のアメリカ合宿では、自由時間を利用し、自分の予定にそって行動できた時間が多かった。それにより、自分で考えて行動することができた。

自由時間を利用して私がしたことは、主に買い物と食事と観光だが、ワシントン大学周辺とホテル周辺を歩き回ったことにより、その辺りの地理には詳しくなった。

アメリカ人は愛想がいいと思っていたら、皆がそうというわけではないようで、セブンイレブンの定員は、日本よりも無愛想だったことには少々戸惑った。

また、カナダのバンクーバー進出も、日数は少なかったが、良い経験ができた。カナダはアメリカに比べ、日本人観光客が多く、日本語が通じる店員さんもいて驚いた。スターバックスも多く見かけ、自分が今どこにいるのかわからなくなるくらいだった。国境を越えるという今までにない経験ができた。先生は、アメリカからカナダに行くほうが楽だとおっしゃっていたが、実際はその逆で、カナダからアメリカに行くほうが楽だった。

カナダでマクドナルドに入ったが、パンの間にチーズが挟まれただけの、ハンバーグ抜きハンバーガーが出て来て、いじわるされた。それもまた、今になれば良い思い出だ。

2. 反省点

やはり、英語力のなさというのを実感した。オーストラリアでも、なかなか勇気を持って話すことができず、相手の言っていることの半分も理解できないこともあった。

今回のアメリカ合宿でも同じことが言える。レストランで、サラダにかけるドレッシングの種類を聞かれて、シーザーしか聞き取れなかったのには自分でもがっかりだ。

また、交流会でも何を話したら良いかということから悩んでしまい、思ったより話せなかった。アレン、ジェフ、デンの三人と出かけた時も、日本語の通じるアレンやジェフに頼ってばかりで、ほとんど日本語で話してしまっていた。日本語の通じないデンには申し訳なく思っている。

自由時間においても、私は川口君と中村君と行動を共にしていたが、道がわからなくなった時など、人に物事を尋ねるのを川口君に任せっきりにしてしまっていた。このことも大いに反省しなければなら

ない。

3. 反省を活かして思うこと。

英語の単語の勉強を少しずつだが始めている。無理をせず続けようという思いで、一日10単語ずつだが、とりあえず、今使っている単語帳の単語全1400単語をマスターするつもりだ。そして、「もう一度シアトルを訪れ、たちちゃんさん達に会いに行く」という最終目標に向けて、努力していこうと思う。

もう一度シアトルを訪れた時は、今回行けなかった所にも足を運んでみようと思う。そして、できるならば一人で行ってみようと思う。誰かと一緒に行けば、今回のようにその人に頼りっきりにしてしまおう。そうならないためにも、一人でシアトルに行き、思う存分英語を話したいと思う。

海外研修が教えてくれたもの

3年 栄村 沙也可

1. 旅の目的

私は、この夏カナダに語学研修として、4週間の短期滞在をした。理由は、ゼミの研修がシアトルだったこともあるが、1番の理由は、今ある現実から逃げたかったからだ。

3年になってからの私は、すべてにやる気をなくしていた。自分の将来の事を考えて、不安に押しつぶされてしまって、何も考えなくなかった。1ヶ月そこらで、英語がペラペラになるとは思わない。ただ毎日変わらない日々から、離れたかったのだ。私は、今回の短期滞在の事で、両親にとっても感謝している。行きたいと思う気持ちがいくらあっても、現実的に考えて、やはりお金の事があった。私の家庭は、決して裕福とは言えない。しかし、親は、お金のことで、私や兄の可能性を潰したくないと言って、できる範囲で今まで好きなことをやらせてくれた。しかし、今回はそう簡単には、いかなかった。反対された理由は、海外に一人で行くことの心配や、簡単に出来る金額ではないということ。海外に一人で行くことには自分自身も不安はあった。けど、今行かないときっとチャンスはもう2度とこないと思った。費用は、本当は自分で全額出そうと思っていた。自分で稼いだお金で行くことに、意味があると思ったからだ。しかし、現実には、そう簡単にはいかず、3分の1しか貯める事ができなかった。

母親は、簡単に行くことを許したら、私のためにならないと思ったのだ。何度も、両親とぶつかり、やっと許しをもらって実現できた今回の語学研修。親の気持ちを無駄にしないよう、現実と向き合えるように成長すること、少しでも語学力をアップさせることが今回の旅の目的だった。そして、ゼミでの信頼を取り戻すために、自分に厳しくなりたいと考えていた。

2. シアトル研修

およそ1ヶ月の個人海外研修後、ゼミのみんなと合流した。今回の海外研修では、甘えを出さないこと、時間を守ること、自分に任せられた仕事を達成させること、英語をできるだけ話すことに心がけた。

学んだこと・有意義だったこと

ゼミでは、プレゼンを英語で挑戦した。初めての英語でのプレゼンで、反省もいっぱいあったが、自信に繋がったと思う。準備に多くの時間をかけた分、達成感はあった。

企業訪問で、途中トラブルもあったが、ボーイング社を訪問できたことは、いい思い出になった。ゼミで、初めて自分に任された仕事を達成できた。少しかもしれないが、みんなの信頼を取り戻すいいきっかけになった。

10日間ずっとみんなといて、ゼミ生みんなの個性を分かることができた。

反省点

「頑張らなきゃ」という気持ちから自分1人で何もかもしようとして、何度かみんなを困らせてしまった。もう少し、みんなと協力すればよかった。

団体行動であるということを忘れて、自分勝手な行動をとってしまい、集合時間に遅れたり、時間にぎりぎりになっていた。何にしても今後はもう少し、時間に余裕をもって行動することを心がけたい。

3、旅が終わって

今回海外に短期滞在や、海外研修ができたことは、とてもいい経験になった。正直、自分自身何か変わったかなんて分からない。海外では、今までと違う自分を見せることができたかもしれないが日本に帰って、これからの生活が、以前と同じでは、行った意味がない。自分自身、何が変わったかは、言葉や考えるだけではなく、自然と行動として表れるものだと思う。

日本に帰ってからも、海外での規則正しい生活をし、前に戻らないようにしたい。そして、もう2度と現実から逃げることなく、きちんと向かい合うようにしなくてはいけない。

アメリカの大学生

3年 関根 大輔

九月九日から研修旅行でアメリカに行くことになった。まずこのような貴重な経験の機会を与えてくださった菅原先生にお礼をしたいと思う。本当にありがとうございました。この旅行では、初めての海外ということで、楽しさ半分、不安も半分という思いでの出発の日を迎えた。

八時前にシアトル空港に着いた。当たり前のことだが、空港で通用する言葉は英語だけであり、何をすることも英語である。空港に着いた時点で自分の英語力の無さをあらためて思い知った。タクシーでホテルに向かったのだが、車は右側を走り、交通量は多く目に入る物全てが初めてのことばかりで、段々とアメリカに居ることの実感がわいてきた。

ホテルに着いたあとワシントン大学に行ったのだが、敷地の広さや綺麗な感じには驚くばかりで、一番驚いたのは休みの期間中なのに学生がたくさん居たことである。これは日本の大学では考えられないことだ。先生の話では「大学生で遊んでいるのは日本だけで、アメリカの大学生は勉強することが普通のことだ」とのことだ。図書館でのあの雰囲気を見たら今の自分の生活ではまずいかなと感じた。また交流会で上手に話せるかが不安になった。

今まで様々な場所で英語を使い、ハンバーガーを頼んだり、タクシーを呼んだりしたけど、自分の英

語は難しいと感じた。でも話しているうちになれて多少の振る舞いは解るようになってきた。そして交流会の日になり、時間があつたのでUWの学生に声をかけに行くことになったのだが、一人での行動となり今までとは勝手が違うので大変だった。

交流会が始まりUWの学生は気さくな人ばかりだったが、やはり言葉の壁が大きかった。会話のキャッチボールになかなかならず、聞きたいことがあるのにうまく聞けないし、相手がしゃべっていることの話しの半分ぐらいは、意味がわからなかった。しかし、UWの学生は日本語が話せるので何度も助けてもらった。自分より若い人が上手に日本語を話すのである。交流会のときは、助かったぐらいにしか思ってなかったけど、後で考えてみると凄いことである。自分もそうだが、周りに外国語をあのように話せる人はほとんどいない。この交流会では、菅原ゼミの英語力のスキルアップにはもちろんなったけど、UWの学生の日本語はかなりうまくなったのではないかと思う。

この研修旅行はとても良い刺激になった。まずアメリカの大学生はとても勉強熱心であること。自分は英語ができないのに、相手が日本語を話せたこと、アメリカという国の大きさなどだ。菅原先生はこれからの時代、日本人だけが競争相手ではないと言っていた。たしかにそうであるが、その相手がこのような人である。今の自分で太刀打ちできるわけもない。だからといって指をくわえて、その姿を眺めていることもできない。

私の場合大学三年のときにきずけたことは救いである。他の海外に出ない、出たとしても観光で終わってしまうような学生よりかは、一步先にいると思う。そしてそこから行動に移すことができれば、二歩三歩と先を行けるのである。わたしの場合は、英語の力をつけるという行動を起こしたいと思っている。今からなら、まだ間に合うかもしれないから、頑張りたいと思う。またもっと外国に行きたいとも思う。日本の常識は世界の非常識かもしれない。そのことを知るためには、日本に居るだけでは絶対に無理であるからだ。新しく訪れる時代、グローバル化の時代だから、世界に目を向けられて世界に通用する人間を目指したい。

初の海外研修を終えて

3年 富田 歩

(1) 今回の合宿を通して学んだこと有意義だったこと

今回の合宿を通して学んだことは3つある。

一つは、9月11日のボーイング社見学の日のことだ。ボーイング社の場所が間違っていて栄村さんが困っているのに少しも助けてあげることが出来なかったのである。この日のミーティングで自分が旅行気分だったこと、また企業訪問や、タクシーの手配、ホテルのチェックインなど、どれだけ他の人に頼っていたかということに気付いた。ゼミでの合宿は個人で行く旅行ではないのだから、皆で協力していかなければならない。また、色々な人と接することが出来る良い機会なのだから、その機会を有意義に活用すべきなのだ。

二つめは、シアトルの学生と交流したことである。交流会とバーベキューを通して、シアトルの学生たちとたくさん話しをした。そこで気付いたことはシアトルの学生たちは必ず「なぜ？」と聞いてきてはっきりとした理由を求めてくるということである。例えば、「英語を話せるようになりたい」と言ったら、「なぜ話せるようになりたいのか」「話せるようになったらどうしたいのか」と深いところまで

聞いてくるので、中途半端な態度では話せないのだ。彼らは何をするのでもハッキリとした目的意識を持っているので私たちにも同じ意識で聞いてくるのだろう。

よく、日本の大学は入るのが難しく出るのが簡単、アメリカの大学は入るのが簡単で出るのが難しい、と聞くがその通りだと感じた。日本の学生が毎日アルバイトをしたり、遊びに夢中になっていたり、おもしろおかしく学生生活を送っている時に、アメリカの学生は毎日出される課題をこなし、どんどん優秀になり、実力をつけているのだ。日本の中において「大学生はこんなもんだ」と甘んじてはいられないのである。

三つめは、英語の重要性である。現地の人や学生と話してわかったことは、簡単な文法と単語を並べればなんとかコミュニケーションがとれるということだ。しかし、私はほとんどの単語を忘れてしまい辞書で調べないと出てこない、また発音も下手なのでなかなか通じないので悪戦苦闘した。アレンが「フランス人はほとんどの人が英語を話せるので会話に困らない」と言っていた。英語を話せばたくさんの国の人と出会い、コミュニケーションをとることで色々な人の価値観や考え方を知ることが出来るのだ。現状のままで満足しては取り残されてしまう。これからは、グローバルな時代だからこそ、英語は必要である。

有意義だったことは、まず、ワシントン大学を見学できたことだ。雄大なキャンパス、歴史を感じる立派な建物、ゆったりとした空間、そして整った環境の大学を見てとても感激した。アメリカの大学は素晴らしいと聞いていたが、こんなに素晴らしいとは想像もつかなかった。

そして、ゼミの人とゆっくり話をする時間があつたことだ。長い時間一緒にいることで今まで見えなかった一面や、その人の人柄を知ることができ、交流が深まったので良かった。

(2) 反省すべき点

1. 仕事をその係りの人だけのものと考えてしまったこと。
2. 一緒にいる人がかたよりがちだったこと。
3. 英語力不足。

(3) 改善点

1. 係りのひとだけの仕事ではなく、ゼミ全体ですべきことなので協力しあう。
2. いつもの仲良しグループで一緒にいないようにする。
3. 英語を勉強する。

(4) 次回に向けての要望

発展途上国を訪れてみたい。

(5) 合宿全体を通しての感想

団体行動の大変さを実感した。団体生活の中では、それぞれが自分勝手な行動をすることは許されない。また、時と場合によって、周りにあわせることも必要である。しかし、皆で協力しあい、助け合うことでひとりでは出来ないようなことも可能になるのだ。

また、国内での合宿と比べ、国外での体験は得るものが多く、楽しく有意義に時間を過ごすことができた。

シアトル、バンクーバー旅行記

3年 中村 光一

1 卑屈な自分

まず、アメリカでというか、これから生きていくうえで、私は、自分の持っている卑屈さと向き合っていかなければならないと感じた。これは、アメリカという、自分をどんどんアピールしていかなければならない場に身をおいてみて、実感した。多分、日本という住み慣れていて、かつ、言い方が悪いかもしれないが、ななあ気味の風潮がある国には実感できなかったかもしれない。いや、実感しても、日本ならその自分の卑屈さを出さない選択肢を模索することを第一に考えていたと思う。

そして、具体的にどんなときに卑屈さを、自分に感じたのか具体的に思い出してみた。とくに、感じたのは、交流会、BBQ、最後の日に自由行動で向こうの学生と行動したときである。要するに、英語での会話をするときである。この旅で、自分の聞くという能力の低さを知ってから、話す前に、必ず、いいことを考えた後に、これで通じだろうかということと、難しいことを返されたらどうしようということを考えるようになってしまった。その結果、一回の会話ができても、どんどん話すことが出来なくなり、一回の会話の後にすごい沈黙が流れてしまい、ますます悪い状況に自分でしてしまっていた。この卑屈さを、取り除くには自分自身が、経験、知識を積み重ねることにより、自信を深めなければならないと思った。

また、話は少しそれるが、以前読んだ本で、卑屈さを取り除くために留学して語学習得をしたライターの話を読んだことがあるが、読んだときは、語学習得と卑屈さを取り除くことに大きな関連性を見出せなかった。しかし、今回始めて海外へ出てみて、その意味が少し分ったような気がした。要するに、語学習得を通して、自分に中に具体的な能力をつけることにより、自信をつけることに大きな意味があるのだと感じた。

また、アメリカについてから、英語が出来ればと、何度も思った自分は、語学の習得が自信につながっていくということ、身をもって実感できた。同時に、これから、自分の卑屈さと戦っていくために、まずは英語の勉強を始めようと思う。英語を聞く能力が以前から自分には、足りないのを知っていた。しかし、結局、以前、先生から薦めてもらったリスニングの本も買っただけで、最初の少ししか勉強しかせぬにいい加減になってしまっている。まずは、その本からはじめたいと思う。そして、自分に自信をつける方法、自分から卑屈さを取り除く方法というのは、まだまだあると思うので、それらを、意識して日々を過ごしていかなければならない。

2 英語

私は、日本の英語教育は話すことを前提においていないから、学校の英語教育だけでは、英語は出来るようにはならないと思っていた。

しかし、話すことを前提にしているかどうかはべつにしても、高校（いや中学かもしれないが）までの英語をしっかり勉強していれば、日常会話には困らない程度の会話なら出来るのではないかと感じた。ここでいうしっかりというのは、話すということを意識して勉強するということである。中学、高校と英語の授業では、教科書の文をテープか CD でどんな発音か聞かせてから、生徒に発音させるが、私の中学、高校だけかもしれないが、この作業をするときは、たいていの人が聞き流すか、てきとうに

発音していた。しかし、この作業というのは、英語を聞き取る際にとっても重要であるということが分かった。なぜなら、単語の意味だけ分かっていても、発音が分らなければ会話が出来ないからである。

要は、英語が日本の教育では出来るようにはならないというのは、自分が英語が出来ないがために使っていた、ただの言い訳だということに気が付いた。

3 大きな収穫

私が今回の研修旅行で得たもので、一番大きなものは、外国の方に話しかける時の恐怖心というか、英語を話すことに対する恥ずかしさが薄れたことだ。確かに、最初は道を聞くのも、怖くて、恥ずかしかったが何回も聞いていくうちに慣れてきていつの間にか、普通に聞けるようになった。その、聞くことになれた要因で一番大きかったのは、交流会につれてくるために、大学内で学生に声を掛けたことだ。正直、はじめはマジでやるのかなとか、声掛けしないで時間つぶそうかという考えが頭にあったが、最初の一人、二人と声を掛けていくうちに、段々、話しかけるのが楽しくなって行って、結局 20 人近く声を掛けることができ、さらに、そのうちの何人かは交流会に参加してくれたので、少しは自信になった。この経験は、多分アメリカで得た一番大きなものだったのではないかと思う。以前、バイト先に外国の英語しかしゃべれない人がきて、自分に話しかけてきたが、結局何も話せず、不快な思いをさせてしまったので、後悔したのを覚えている。しかし、今度、同じような状況に出くわした場合には、何を言っているのか分からなくても、「少しお待ち下さい」くらいは、英語でいえる自信はある。この自信も、やはり、UW の学生に声を掛けたことから得られたものだと思っている。

4 最後に

初めての海外で、分からないことも多く、緊張しっぱなしだったのですが、少しはアメリカの生活がどんなものかも分ったし、チップ、買い物などの会話といった日本とは違った習慣も分って勉強になった。

最後に、このような充実した研修旅行をさせてくれた先生に、とても感謝しています。本当にありがとうございました。

「八王子村から世界への第一歩」

3年 村松翔子

今回のシアトルへの海外研修は、私にとって何もかも初めてのことばかりだった。まず、飛行機に乗ることが初めて。そして、もちろん海外旅行が初めてだった。日本でさえ、本州から出たことがなかったのである。そんな私の 10 日間の旅は、自分自身にとってとてもプラスになるものだった。あんなにも有意義な時間を過ごせるなんて、行く前には想像すらできていなかった。正直、行きたくないと思っただけでもあった。今はそんな風に思っただけ自分を、後悔してしまう。発見、反省、そしてこれからの課題の 3 つにわけて、この旅を振り返ってみようと思う。

「新たな発見」

海外旅行がはじめての私にとっては、やること見ることすべてが新しく新鮮に感じられた。パスポ

ートを作ることすら緊張した。飛行機に乗るのも、今までテレビでしか見たことのない世界だったので、とてもワクワクしていた。行きの飛行機では、とても窮屈で全然寝ることができず、もう飛行機なんてこりごりだと思った。帰りは疲労と睡魔のせいで、飛び立つ瞬間にはもう意識がなかった。窮屈だったけど、寝てれば何とかなる！と学べた気がする。

アメリカに入国する時、アメリカからカナダに入国する時、そしてカナダからアメリカに入国する時。いずれの時も、英語が全然話せないことで、かなりの不安があった。しかし、ここで大きな発見。笑顔は世界共通。言葉はうまく伝えられなくても、まずはじめに笑顔で挨拶を交わしたら心と心は通じ合う。それは、どんな場面でもそうだった。ホテルのフロント。道行く人。お店の店員さん。言葉を交わすそれ以前に、笑顔で挨拶ができたら相手との距離が一気に縮まるものだ。相手の笑顔は私に安心感を与えてくれるものであった。

10日間旅したが、結局最後まで英語をピシッと話すことはできなかった。そして、相手の英語を完璧に理解することもできなかった。しかし、単語と単語をつなげながらも、相手に自分の意思を伝えることができた。部分部分ではあったが、相手が何を言おうとしているかを、理解することができた。最初は、自分の英語力の無さで臆病になり緊張し、道を尋ねることすらできなかった。英語が話せる人に頼りきりになってしまい、後をついていだけだった。しかし、そんな自分がものすごく情けなかった。来たからには、英語力を身につけて日本に帰りたかった。私の英語が、どこまで相手に伝わっていたかはわからない。だが、伝えたいと思い、努力することは消して無駄ではないと感じた。臆病な心に負けないで話し掛けて、自分の英語が通じたときには本当に嬉しかった。頭で考えていても仕方ない。行動に移さなければ結果はわからない。そんなこと今までもわかっているつもりでいた。しかし、今回の旅でまた新たに、挑戦すること、行動することの大切さを再認識した。そして、私の英語でもなかなか伝わるものだ嬉しく思った。

同じ学生として恥ずかしく思うのだが、アメリカの学生はすごい！そして、大学が広くてきれいでうらやましい。私もあんな大学で勉強したいと思った。交流会のおかげで、何人かの学生と触れ合うことができた。そこで一番感じたことは、アメリカの学生は自分を強く持っていることである。自分の意思、自分の気持ち、自分というものを明確に伝えてきてくれた。目標や目的がはっきりしていると感じた。日本では、多くの学生たちが、将来に向かっての決められた流れに乗っているようなところがあるように私は思う。しかし、私が出会ったアメリカの学生たちは、自分の気持ち、自分らしさを尊重している。だからこそ、あんなにも熱心に勉強しているのだろう。

アメリカは自由の国だと言われている。そんなことから、私は、学生の熱心に勉強する姿は想像すらしていなかった。だからこそ、学生たちの熱心に勉強する姿は、大きな発見であり衝撃であった。私の学生生活はもう半分は過ぎてしまった。しかし、彼らの勉強に対する姿勢は、間違いなく私の残りの学生生活に影響を与えるものとなった。

「次につながる反省を」

この旅での反省点は、とにかく自覚の足りなさである。旅に対しての取り組み方が甘すぎだった。まず、事前にもっと勉強しておかなければならなかった。英語はもちろんのこと、シアトルについても、もっと事前に調べておいたら今の二倍も三倍も旅を楽しめただろう。

先生に、少々英語を勉強しておきなさいと言われていたにもかかわらず、何の準備もしなかった。その結果、何をしても英語を話せる人に頼りきりになってしまっていた。自分でどうにかしようとい

う気持ちが、あまりにも低かった。英語が話せる話せないに関係なく、何か問題が起こったときにも、他人事のように捕らえてしまいがちだった。そんな私の甘えがあるせいで、影で苦労する人が出るはめになってしまったのだろう。

そして、この旅がゼミの研修であるという認識も低かった。シアトルに着いたら、楽しくて嬉しくて、とにかく自分が楽しむことで頭がいっぱいになってしまっていた。とにかく気の合う友達と楽しく過ごすことばかりが頭の中にあったような気がする。というより、無意識のうちに自分の行動がそうになっていたのだ。周りではなく、自分の楽しさばかりを優先させてしまっていた。

先輩や仲間のおかげで、早い段階で自分の甘さに気がつくことができたことがせめてもの救いである。10日間の間、気づかないまま過ごすことにならなくて本当に良かったと思う。自分のことばかりになって、相手や周りに対する心遣いがかけてしまっていた旅の最初を、今は本当に後悔し反省している。

「発見・反省をふまえたうえで、これからの課題」

先生が「八王子村から出て行かなければならない。」とよく言っていたが、今回の旅で、その言葉の示していることを理解することができた。私は静岡から八王子に出てきた。しかし、それで満足してはいけいない。もっともっと広い世界へ行くことが、自分の成長につながる。世界にはもっともっと多くの国があり、多くの文化があり、たくさんの人たちがいる。それを知らないまま過ごしていくことが、どれだけでもったいないことをひしひしと感じた。そして、自分の知らない世界を知ることは、自分の知らない自分を知ることにもつながる。そのためには、どんなことにも挑戦していける自分になることが大切なのだ。

この旅では人との触れ合いがかなり大きかった。ワシントン大学の学生や、先生の知り合いの方にもすごくお世話になった。そして、ゼミ内においても、いつものゼミでは気付かないことをたくさん気付くことができた。四年生の先輩たちは、三年生のことを良く見てくれていて、どうしたらみんなが団結し楽しくやっていたかを真剣に考えアドバイスしてくれた。

ゼミ長の神田君には、何から何までまかせきりになってしまった。神田君は、自分のためではなくみんなのために常に行動してくれていた。彼の責任感あふれる行動には、感謝してもしきれない。そして、神田君を影で支えていた岩井君にも本当に感謝している。特にみんなの前に出ることは無かったが、神田君同様、常にみんなのことを見て、みんなのために一生懸命になってくれた。栄村さんには、英語が話せるということで、何から何までやってもらってしまった。みんなより一ヶ月早くカナダに行き、ホームステイして勉強するという彼女の行動を、私は本当に尊敬している。ほかのメンバーももちろん、今まで知らなかった良い点を気付くことはできた。しかし、彼ら三人には本当にありがたさでいっぱいである。そして、厳しく優しいりんさんと出会えたことも、この旅での大きな刺激である。

今までの私は、自分の何ができるかということばかりを考えていた。考えて臆病になり、何もできないままだった。しかし、それが自分に対する甘えだった。何ができるかということも大切だと思う。だが、それ以上に、自分が何をしたいかが大切なのだ。その気持ちさえあれば、今まで以上に挑戦する気持ちを強く持てると思う。これからは、どんどん八王子から出て行き、自分の可能性を広げていきたい。

私の初の海外旅行、この10日間の旅は、最高の仲間に出会えた本当に最高の旅だった。

2 1年目の初海外

3年 山下 由佳

菅原ゼミに入って1年、私は初めて経験することばかりである。パワーポイントを使っただけのプレゼン、九州上陸など、大学生活に活気が出てきたと感じる。今回、海外研修と聞いて、費用は自己負担、会話が成立するほどの英語力もなく、パスポートもクレジットカードも持っていなかった私は、もちろん海外へ行った経験はない。準備の段階で既に緊張していた私は、海外研修に行っても大丈夫であるか不安だった。人生21年目にして、最大のイベントである。

飛行機に乗るのは、長崎合宿に続き2度目で、しかも日付変更線を越えるとなると不思議な感覚さえあった。時差を気にして生活したことも、日本語が聞こえない場所で過ごしたこともない。研修というより、観光気分で日本を出発した。

今回、3年生は海外研修での係りを決め、それぞれが係りの役割を果たすことに専念した。私は交流会を担当することになり、交流会で何をやるか、時間配分はどうするか、シアトルの学生への配慮をしながら、計画を立てていった。しかし、最終会合ぎりぎりまで、計画は曖昧なまま出発することになる。

事前準備が不十分のままシアトルに到着した私は、10日間の研修を思い切り満喫すると同時に、苦悩することなど全く考えていなかった。

1 . UNIVERSITY OF WASHINGTON

シアトルに到着し、1日目から3日目はUNIVERSITY OF WASHINGTON(以後UWと記す)でのゼミ活動だった。1日目の見学で、大学の規模の違いに圧倒した。施設も十分すぎるほどで、休みとはいえ、学生は黙々と勉強している。構内を歩いていて私が発見したことは、ほとんどの学生が一人で行動していること。UWの学生が勉強に費やす時間は、日本の学生とは比べものにならない。この比較対象は、私自身なのだが。一人でいるということは、集中できるからなのか。見習うべき学生の姿勢をUWで見た。

2日目に行なわれた3年生のプレゼンでは、自分以外のプレゼンにただ驚くばかりで、私自身、自分のプレゼンに全く手応えを感じなかった。ただ言われた課題をやってきた。そのことに満足して、内容を深く追求されると何も答えることができなかった。頭に詰め込むべき知識が不十分だったため、4位という結果を招いた。この時味わった悔しい思いを、今後のゼミ活動に生かしたい。そのためには、他の人のプレゼンからいい部分を学ぶこと。例えば、課題の内容だけに留まらず、知識を応用させる。富田さんのプレゼンは、その良いお手本だと思う。彼女に負けないプレゼンができるように、私に課せられた課題は、日々勉強だ。

2 . 反省会

3日目の夜、反省会が開かれた。私はこの時、自分が自分のことばかり考えていたことに気づかされる。この日、トラブルが生じ、一部の人間がそれを解決しようと一生懸命走り回っていた。私は、トラブルが生じた時点で、何が起こったのか知らうともせず、人にすべて押し付ける結果になってしまっ

た。観光気分が抜けず、常に同じ人と行動していたことも、全く気にしていなかった。しかし、この日の反省会で、私の行動すべてを指摘されているのではないかと思うほど悩んだ。それは、「誰かに言われないと行動できない人がいる。そうではなく、自分から状況を察して行動しなくてはならない。」というゼミメンバーの発言を聞いたからである。胸が締め付けられ、体が硬直した。そのくらいショックは大きかった。自分のことで精一杯になって、自分以外の係りに就いていた人の手伝いもできずにいた。自分が楽をしている時は、その分必ず苦勞している人がいる。私はこの時、そのことに気づけて良かったと思う。もし気づけていなければ、研修中はもちろん、状況は違うとしても、通常のゼミ活動でも同じことを繰り返し、自分の分まで苦勞する人が増えていたに違いない。3日目にして、海外研修に参加した意味をも考えさせられる重要な反省会となった。

3. 英語力

勉強不足の一言だ。英語の基礎はあるのだが、全く応用できない。自分の英語力に気づくのは、交流会とバーベキューパーティーの時だ。

交流会開始の1時間前、参加者を増やすため、UW内を散策しながら学生に声を掛けた。メモを片手に、日本人独特の発音で。残念ながら、結果は一人も誘えなかったが、嫌な顔せず話を聞いてくれた学生に優しさを感じた。いよいよ交流会がスタートし、予想していたよりもはるかに多い学生が参加した。自己紹介を済まし、いざ会話をしようとしても言いたいことがなかなか頭の中で英語にならない。質問は聞き取れるのだが、返答ができずに困っていると、日本語を話せる学生が日本語で話をしてくれた。しかし、その行為に甘えてしまい、せっかくシアトルに来たのに英語を使わず、無駄なことをしていると、徐々に気づく。

次の日はバーベキューパーティーだった。英語を使うことにも慣れ、片言ではあるが、必死に伝えようとジェスチャーをしながら、会話が途切れないように努力した。日本で流行っているゲームをしたり、逆にゲームを伝授してもらったりと、楽しい時間はあっという間に過ぎた。

交流会とバーベキューパーティーで英語を話すことの楽しさを知った私は、個人研修の時間でも積極的に英語を使うようになった。道が分からなくなった時、タクシーに乗りたい時、お店で商品の値段を聞く時、レストランで注文する時。あらゆる状況で英語を思い切って使うことができた。ここでまた一つ成長した。

4. 最も重要なこと

私は2つ挙げたい。

まず1つ目として、反省会の部分でも触れているが、今回の海外研修で学んだ大切なことは、“自分が楽をしている時は、その分必ず苦勞している人がいる”ということだ。私は、交流会の係りとして何一つ仕事ができなかった。こんな楽をしている人間がいる中で、ゼミ長である神田君を始めとし、自分の仕事を責任持って終えた人の苦勞は計り知れない。

2つ目に、人間関係である。先生がおっしゃっていた“10日が限度”という意味が分かった。一緒にいる時間が長ければ長いほど、今まで分からなかった人間のいい部分、悪い部分が見えてくる。気を遣うことも、我慢することも、人間だからすることである。集団行動の難しさもはっきり見えてくる。今回は、時間厳守という点で注意深く行動することがほとんどであった。当たり前のことだからこそ、できなかった時に迷惑をかけてしまう。これに限らず、すべてが貴重な経験であり、勉強だ。

5 . 最後に...

総合して言えることは、充実した12日間だったということ。留学したいと思ったのは、きっと私だけではないだろう。ばらばらになったパズルを組み合わせるのが大変なように、それぞれ違った目的意識を持った16人を一つにまとめるのは大変である。しかし、今回の海外研修で菅原ゼミの結末は強くなったと思う。

海外旅行が世界経済を変える

3年 山下 由佳

世界は今、グローバリゼーションという大きな流れの中で、1つになりつつある。だが、その一方で、いくつかの国々が地域的経済統合といったグループを形成している。EUはその代表的なグループであるが、文中にも出てきたNAFTAも含まれる。結果、1つになりつつあった世界は、いくつかのグループに分裂しているという流れがあることを注意しなければならない。日本がもし、地域的経済統合をするならば、どんな国が選ばれるのだろうか。そして、そのグループはうまく機能していくのだろうか。

例えば、中国と韓国と日本で経済統合すると想定しよう。今や、経済発展が爆発的な中国を抱えていることもあって、注目されるのは間違いないであろう。日本からしてみれば、中国への直接投資がますます盛んになり、国内物価の下落で、実質所得もますます上昇する。直接投資を受け入れることで、工業化を成功し、経済発展する国が増え、世界経済がより活発化するならば、地域的経済統合をしてみてもいいのではないかと思う。

世界経済のキーワードとして、「為替の安定」と「自由貿易」が挙げられる。この2つのルールを作ったのは、やはりアメリカであり、また、アメリカを中心とする先進国もそうである。世界中の国々の人々が、このルールに必ずしも満足しているかと言えば、そうではない。アメリカを中心とする先進国の存在の背景には、2つのルールに賛成できない、反対派がいる。これが、無視できない裏の部分である。市場経済のメカニズムだけでは、貧富の差の拡大や、公害・環境問題といったさまざまな問題の解決策が見つからないのと同様に、地球的規模で市場経済が進展すれば、地球的規模で貧困問題や環境問題が拡大してしまうのである。

グローバリゼーションを考えていく上で、「国際収支」という言葉も忘れてはならないと思う。その中で、サービス収支に着目するとおもしろい。

9月に行ったシアトルが、私自身初めての海外旅行兼研修だった。私は、今回のシアトル研修で、日本人は海外旅行が好きなのだなと感じた。それは、シアトル空港やロサンゼルス空港でたくさんの日本人を見かけたからである。日本を離れて、聞こえてくるのは英語だけのはずが、日本人が多いため、日本語が耳に入ってくる。せっかく海外へ来ているのに、という残念な思いをした。私は、何もかもが初めてだったので、見るものやることすべてが新鮮だった。それだけいろいろなものに興味が持てた。でも、何度も海外へ足を運ぶ日本人の慣れた行動は、やはりうらやましい。

日本人が海外旅行をすることができるのは、なぜなのか。ゴールデンウィークや、夏期休暇を利用して日本を飛び出す理由は何なのか。サービス収支 = 海外旅行によってもたらされる経済効果を分析する。

海外旅行ができる人はどんな人なのか。私のイメージは、裕福な生活をしている人である。給料も

安定していて、休みもある大人が、仕事で溜まったストレスを発散させるかのように海外へ飛ぶ。現状を見ても分かることだが、私の持つイメージは決して当てはまらないことはない。実際、世界の比較的豊かな国（先進国）の人々は、海外旅行を頻繁にできている。特に、欧米先進国の人々であるが、日本人もその中に含まれるのは間違いない。

海外旅行の魅力は何なのか。近くても遠くても、安く海外へ行けるのなら、行きたいと思う人はたくさんいる。不況と言われる現在の日本で生活していると、安ければ安いほど魅力的なものはない。ユニクロの洋服も、100円ショップも、レディース限定の格安温泉ツアーも、不景気だからこそ人気があり、注目される。その背景には、国境を越えた経済活動があるのだが（ユニクロ現象など）、実際、日本から遠い国（特に欧米）へ行くとなると、やはりそれなりのお金がかかる。国際的にも、今はテロの危険性が十分にあるため、海外へ行く人が減っている傾向もあるが、日本人は海外のいろいろな名所やそこでしか口に出来ない料理のために、高いお金を出して行く。それだけ魅力があるからだ。もったいないという考えはない。私も、シアトルの町並みや人の優しさ、自然たっぷりの景観に魅了され、“せっかく来たのだから”とお金を使った。

日本人が海外旅行へ行くことは多いが、逆に、海外から日本への観光客を見てみるとどうだろう。東京に住んでいると、外国人を見る機会は多い。学校に行けば、留学生がいる。また、京都や奈良といった歴史的価値のある、日本の雰囲気たっぷりの観光地でもよく見かける。東京ディズニーランドやユニバーサル・スタジオ・ジャパンなどのテーマパークも、中国や韓国から来た観光客がたくさんいる。だが、日本人が海外へ行く割合と、海外から日本に来る人々の割合を比較してみると、結果、サービス収支は赤字である。以前見たテレビニュースでも、日本への旅行客を増やして経済効果をもたらそうと、必死に計画が練られていると放送されていた。“Welcome to JAPAN”と題して、外国人を日本に呼び込む案が考えられているようだ。

世界経済の流れの中で、商品が国境を越え、海外から海外へ移動し、市場で売買させるのと同じように、国内だけでなく、人も国境を越えて、海外へと移動し、グローバル化を盛り上げていくことは、分裂した世界の亀裂を失くす、大事な要素だと思う。先進国の人々が、途上国へ行き、その国の現状を知れば、貧困問題の解決策が浮かぶかもしれないし、少なくともきっかけにはなると思う。

海外へ行くようになれば、その国の通貨について知ることができる。実際、私も、米ドルとカナダ・ドルに苦戦した。同じ\$15でも、国境を越えれば、通貨も価格の基準も異なる。

海外旅行ひとつにしても、得るものは観光の思い出だけではない。八王子村から世界へ飛び出すこと＝グローバル化を認識する、ということではないだろうか。ただ観光を楽しむだけだと思っていたが、海外旅行は、世界経済のつながりを考える上では、いいきっかけになるのかなと思う。

海外研修旅行に参加して考えたこと 私の研究と関連付けて

菅原ゼミ 2 期生 (OB) (早稲田大学大学院社会科学部研究科修士課程) 太田 林一

去る 9 月 9 日から 19 日まで実施された菅原ゼミアメリカ海外研修旅行に参加する機会に恵まれた。私は菅原ゼミ在籍中に海外研修旅行を通じて、香港 (2 年)、タイ・カンボジア (3 年) の 2 カ国 1 地域を訪問する事が出来た。その中でも特にタイ・カンボジアへの海外研修旅行は、カンボジアで目の当た

りにした貧困の実状に大きな衝撃を受け、大学院へ進学し学びたいという、私にとっては大きな転機となるものであった。今回、その海外研修に再び参加した上で、改めて「グローバルゼーション」について考えてみたい。

今回訪れたシアトルは、1999年に世界貿易機関（WTO）の閣僚会議が開催された地であり、WTOが推進する市場経済体制に代表されるグローバルゼーション（アメリカ型グローバルゼーション）に対して多くの市民団体が異を唱え、そのエネルギーが常軌を逸した街頭活動にまで発展し、会議そのものが失敗に終わったことは未だ記憶に新しい。これを機に「反グローバルゼーション」議論の機運が世界的に高まった。

WTOが推し進める市場経済体制は、先進国主導のものであり、その中心役はまさに米国である。一方、多くの途上国はこの現実を前にして「アメリカ型の市場経済体制」を絶えず意識しながら、自国の経済発展に取り組みざるを得なくなっている。しかしながら、このアメリカ型市場経済体制はあくまで一つの「モデル」でしかない。考えてみれば、各国にはそれぞれの国民経済システムがあり、また、その中で培われてきた「経済文化」を有している。そこへアメリカ型市場経済モデルを一辺倒に適応させようとする今日の動きに批判が集中するのは当然の事であろう。アメリカ型の市場経済体制にも欠陥はあるし、また、恒久的な経済好況を保証するものでもない。

さらに、市場経済体制の拡大とグローバルゼーションの浸透によって生じる所得格差拡大の問題がある。それは所得格差が国内的にも国際的にも拡大しているというものである。アメリカ国内だけを見ても、富裕層と貧困層の所得格差が年々拡大の一途をたどっており、社会問題化している。ここでの問題は「努力した者が報われる（＝富を得る）」というメカニズム自体を否定するものではない。インセンティブとしての「格差」は当然認められるべきである。ここでの議論はその格差が許容範囲をはるかに超えているということである。これは巨視的にはそのまま先進国対途上国の構図となる。ただし、どこまでを許容範囲とするかについては見解が分かれるところであり、議論の余地がある。

このように、アメリカ型グローバルゼーションがもたらす負の側面に我々はこれまで以上に細心の注意を払わなければならない。無論、グローバルゼーションには負の側面だけではなく、正の側面も存在するという事は言うまでもない。ただ、すでに述べたように、アメリカ型市場経済体制が市場経済の「唯一神」ではなく、なお改善点を持つ市場経済モデルであることに留意するべきである。しかしながら、このアメリカ型市場経済モデルはこれからも強い影響力を持ち続けると考えてよい。その一方で、反グローバルゼーションの動きも依然として続くであろう。そこで懸念されるのは反グローバルゼーションが「途上国の利益」という偽盾を持って市場経済体制拡大を阻止しようとする動きである。途上国の中には市場経済体制を積極的に導入し、グローバルゼーションの波に乗り、徐々にではあるが、経済的結果が現れている国もある。このことから、グローバルゼーションは両刃の剣であるとの観点に立ち、市場経済体制とグローバルゼーションが一概に国際的な経済格差を増大させるという見解についても同時に再考する必要がある。